

小笠山の奇観「六枚屏風」

柴 正博

小笠山のハイキングコースのひとつに六枚屏風という見学スポットがある。小笠山は平日でも多くの人が訪れ、人気の見学スポットのひとつである。ここは、岩崖に幅1mほどの狭い垂直の割れ目が奥に約40mつづいていて、夏でも冷涼で神秘的な雰囲気がある。

六枚屏風のような切り立った亀裂のある岩壁群は、礫層がつくる特徴的な地形で、日本では鮮新世～更新世（500万～1.2万年前）の時代の礫層の地層からなる山地や丘陵によく見られる。礫層は垂直な地形が安定しているために垂直な崖をつくり、そこにしばしば狭い垂直な割れ目のような侵食谷がつくられる。このような崖は、小笠山の東麓はもちろん、静岡県内では他に蒲原の東西の海に面した丘陵の崖、久能山周辺の有度丘陵の南崖にも見られる。このような地形で国の天然記念物になっているものとして、徳島県阿波市の「阿波の土柱」がある。

六枚屏風がある小笠山東麓には礫層が広く分布し、西に入る沢にはこのような切り立った礫層の崖があり、六枚屏風のように亀裂のある谷も見ることができる。小笠山を含む小笠丘陵は、東麓の下部に泥層が分布するものの、ほとんどが礫層からなり、それらの地層が西に5～10度程度傾斜するため、東麓が急傾斜で西麓側にゆるやかな斜面をもつ東西に非対称な丘陵をなしていて、その東西断面の形からケスター地形とよばれる。

六枚屏風は、私たちの研究で明らかにした層序（地層の重なり方の定義）で言うと、小笠層群曾我層上部の岩井寺礫部層からなる。小笠層群は、掛川市に広く分布する鮮新世～前期更新世（約460万～約180万年前）に海底で堆積した掛川層群の上位に、前期更新世～中期更新世前期（約180万～約40万年前）に海底の三角州または湖底・河川など扇状地で堆積した地層からなる。

この小笠層群は、小笠丘陵だけでなく、その北西の可睡丘陵から磐田原台地の北部に、



小笠山の六枚屏風

そして南東の御前崎市南山丘陵の一部にも分布する。私たちは、この小笠層群を下位から曾我層、大須賀層、可睡層、袋井層からなると区分し、それぞれの地層が堆積した年代を、広域火山灰層と古地磁気極性などから178～118万年前、118～91万年前、91～78万年前、78万年前以降と推定した。

小笠層群は、赤石山脈を中心とする遠州地域の大規模な隆起が始まったことにより、天竜川と大井川からの大量の砂礫の供給によって、海岸付近に形成されたファンデルタ（三角州と扇状地）に堆積した地層である。曾我層堆積期には、磐田原北部から可睡丘陵、小笠丘陵東麓にかけて西側の天竜川の河口からつづく波浪の強い遠浅な海岸がつづいていて、その外浜から大陸斜面の海底に砂と泥が堆積していた。その末期には、天竜川から大量の礫が北西～南東方向の海底谷に流れ込み、その谷を埋積した。その礫層が六枚屏風をつくる岩井寺礫部層である。